小林達雄　1978　「縄文土器の製作」『日本の美術　145 縄文土器』　至文堂
小林達雄　1979　「土器作り」『日本の原始美術１　縄文土器Ｉ』　講談社
佐原　眞　1967　「山城における弥生式文化の成立」『史林』第50巻第５号
佐原　眞・鈴木公雄訳　1974　「ヨーロッパ先史時代の土器作り」『考古学研究』第20巻第４号
佐原　眞　1986　「１　粘土から焼き上げまで」『弥生文化の研究３』　雄山閣
杉原荘介他　1976　『加曽利南貝塚』　中央公論美術出版
中村哲也　1990　「古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器の胎土・製作技法の特徴」『古屋敷遺跡調査報告書』　富士吉田市史編さん室・古屋敷遺跡調査団
深澤芳樹　1985　「土器のかたち－畿内第Ｉ様式古・中段階について－」『紀要Ｉ』　財団法人東大阪市文化財協会

＜資料紹介＞

千葉県四街道市千代田遺跡採集の土偶３例

田　中　英　世

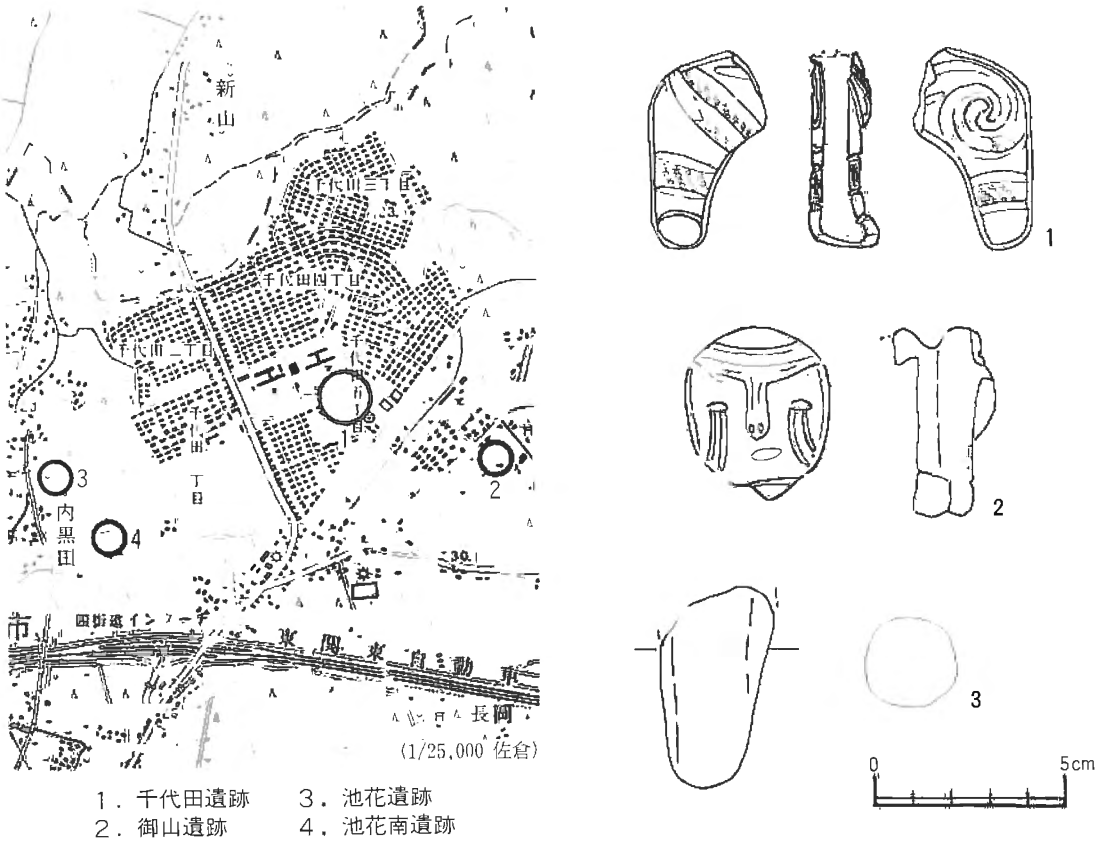
Ⅰ

千代田遺跡は鹿島川下流の小支谷（手繰川上流）に位置し、古くから「炮烙台貝塚」（伊藤他1959）や「八木原貝塚」と呼称されており、過去３度に亘る発掘調査により縄文時代の住居址14基の他に、ハマグリ・シオフキを主体とした貝層も検出されている（八幡他1972、米内1977・1978）。従来より後期から晩期前半の良好な遺跡として知られており（註１）、周辺には吉見台遺跡・池花遺跡・池花南遺跡・御山遺跡等の晩期の諸遺跡が所在する。

ここに紹介する土偶は昭和49年４月の踏査の折りに採集したものである。踏査時には既に造成が行なわれており、地形等は確認できなかったが、公園として残される予定の貝塚とは道路を隔てたすぐ北東部にあたり、土器は採集されなかった。昭和46年の発掘調査により第Ⅴ区とされた地点の南西端にあたると思われる。

Ⅱ

第１図１は左足の部分で現存高5.4㎝を測る。前面には腰部に２本、中央部に１本の縄文帯を有し、裏面には沈線により渦巻文を施す。



第１図　千代田遺跡と採集遺物

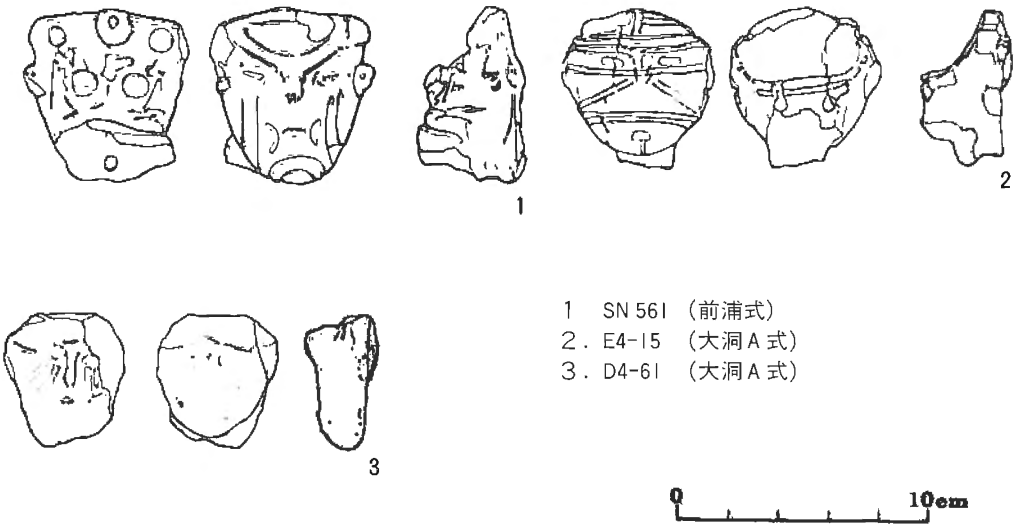
同図２は現存高4.6cmで楕円形を呈し、Ｔ字形の隆帯により眉と鼻を表わし、刺突により、目と口を描出している。眉の上と顎の下に横位１条の、左右の目の下には縦位２条の沈線を施している。

同図３は粗雑な、文様を持たないもので、現存高5.2cmを測る。所謂下位土偶（鈴木　1982）とされるものである。

Ⅲ

１の土偶は充塡縄文と渦巻文で特徴づけられるもので、安行Ⅲｂ式期のものと思われる。２の土偶は、顔面が前に突き出す特徴や頬および顎の沈線による表現は、西広貝塚（米田　1977）のＳＮ561 晩期包含地点より出土した前浦式期のものとされている土偶（第２図１）に類似するが、眉および刺突による目の表現は、同貝塚Ｄ－４区から出土した大洞Ａ式期のものとされている土偶（第２図３）に近く、この土偶もほぼこれに近い時期のものと思われる。

千代田遺跡からは80点に近い土偶が出土しているが、晩期の報告例は少ない。千葉県の晩期の土偶については昭和55年の市川博物館による集成（市立市川博物館　1981）以降、鷹野光行氏



第２図　西広貝塚出土土偶

（鷹野　1983）や原田昌幸氏（原田　1984・1985）、鈴木正博氏（鈴木　1989）等による資料紹介や編年が行なわれており、様々な問題点の指摘もなされている。周辺に位置する池花南遺跡からは、千網期の包含層から有髯土偶が出土しており（千葉県文化財センター　1986）、子和清水遺跡でも千網期の包含層から福島県西方原遺跡に類例が求められ、大洞A′式土器に伴なうとされている土偶（中村　1988）の肩の部分が出土している。

土偶を採集した第Ⅴ区についての発掘所見は「縄文時代は本区東端部に晩期が、西端部に後期の住居址および包含層が検出され、両者に挟まれた地域では、微々たる量の土器破片が発見されただけであった」（八幡他　1972）（註２）とされているが、支谷を隔てた南側の第Ⅳ区でも良好な晩期の包含層が存在している他、第Ⅴ区からは浮線網状文を有する土器も検出されている（註３）。未報告の資料中には多くの晩期の土偶の存在が予想され、今後の発表が期待される。

（財団法人千葉市文化財調査協会）

註

1　この他に表採資料の報告として、田川直「千葉県四街道市千代田遺跡採集の資料(1)」（奈和第26号　1988）がある。

2　後期においても第Ⅳ区と第Ⅴ区においては、遺跡の在り方に相異があることが指摘されている（小川　1989）。第Ⅳ区における晩期包含層については「第５号住居址より北東50ｍの地点に晩期安行Ⅲａ式から安行Ⅲｃ式、前浦式土器の出土が知られている。これはⅤ区の東端で検出された晩期包合（ママ）層と類似する。なおこの地点とは一分支谷を挟んでわずか450ｍを隔たるのみである。しかし晩期包合（ママ）層として類似するとはいえ、Ⅳ区では初頭にその中心をおくのに対してⅤ区では中葉におく。」とされている。

3　報告されている浮線文土器は氷Ⅰ式に並行するものと思われる。千葉県の浮線文土器は3期に分けて考えられ、第1期には石道谷津遺跡・西広SN561晩期遺物包含地・殿台遺跡第Ⅵ群土器、第2期には池花南遺跡・五斗蒔遺跡、第3期には龍正院貝塚・高崎新山遺跡が相当し、荒海貝塚第六群土器・殿台遺跡第Ⅰ群土器・山武姥山群貝塚の各資料は第2期から第3期に亘るものと考えられる。千代田遺跡の浮線文土器は第3期に相当する。

参考文献

市立市川博物館　1980　『千葉県の土偶』

伊藤和夫・金子浩昌　1959　『千葉県石器時代遺跡地名表』　千葉県教育委員会

小川和博　1989　「千代田遺跡雑感」『竹箆』第6号

鈴木正博　1982　「埼玉県高井東遺蹟の土偶について」『古代』第72号

1989a「安行式土偶の基礎」『古代』第87号

1989b「荒海土偶考」『利根川』10

鷹野光行　1983　「安行の土偶覚書」『歴史公論』No.94

千葉県文化財センター　1986　『千葉県文化財センター年報12』

1989　「弥生時代」『房総考古学ライブラリー』4

原田昌幸　1984　「成田市殿台遺蹟出土の土偶」『なわ』第22号

1985　「印旛沼周辺における低地遺跡の研究－印旛村吉高－本松遺跡出土資料報告」『なわ』第23号

中村五郎　1988　『弥生文化の曙光』　未来社

八幡一郎他　1972　『千代田遺跡』　四街道千代田遺跡調査会

米内邦男　1977　『千代田遺跡発掘調査概報』　四街道遺跡調査会

1978　『八木原貝塚調査報告』　四街道遺跡調査会

米田耕之助　1977　『西広貝塚』　上総国分寺台遺跡調査団編

貝塚博物館紀要　第18号

1991年3月25日　印刷

1991年3月31日　発行

編集・発行　千葉市桜木町163番地
千葉市立加曽利貝塚博物館
TEL 0472 (31) 0129

印刷所　㈲正文社